

## 会議記録

会議名	第3回 杉並区教育振興基本計画審議会
日時	令和3年1月25日(月) 午後6時00分～午後7時54分
場所	杉並区役所 中棟5階 第3・4委員会室
出席者	<p>委員            牧野、小国、大津、加藤、片山、小早川、渋谷、西山、増田、松野、大竹、河邊、松浦</p> <p>区側            教育長、教育委員会事務局次長、教育政策担当部長（教育人事企画課長事務取扱）、学校整備担当部長、中央図書館長（教育委員会事務局庶務課生涯学習担当部長兼務、中央図書館次長兼務）、庶務課長、学務課長、特別支援教育課長（就学前教育支援センター所長兼務）、副参事（子どもの居場所づくり担当）、学校整備課長兼学校支援課長、学校整備担当課長、済美教育センター所長、済美教育センター統括指導主事（古林、宮脇）、済美教育センター教育相談担当課長</p>
配布資料	<p>22-2 「杉並区教育ビジョン」に対する区民等のアンケートの実施結果について（追加報告）</p> <p>24 第3回杉並区教育振興基本計画審議会席次表</p> <p>25 第3回杉並区教育振興基本計画審議会区側出席者名簿</p> <p>26 第2回杉並区教育振興基本計画審議会委員意見のまとめ（資料19-1～3記載された各意見、及び第1回審議会意見を含む）</p> <p>27 これまでの審議会委員意見等の項目別分類</p> <p>28 従来型の教育基本計画（教育ビジョン）の構成と資料27記載項目の対照イメージ</p>
会議次第	<p>1 開会</p> <p>2 資料説明</p> <p>3 意見交換</p> <p>4 事務連絡</p> <p>5 閉会</p>

○会長 定刻になりましたので、第3回杉並区教育振興基本計画審議会を開催したいと思います。

委員の皆様におかれましてはご多忙の中、またコロナ禍の感染の厳しい中、全員の方にご出席いただいております。誠にありがとうございます。

本日、初めてオンライン開催も併用しております。今日は大津委員、小早川委員、それから河邊委員がオンラインでの参加となりますので、どうぞよろしく願います。

さらに、今日は雑誌「なみすく」から取材が入っており、議事に入る前に傍聴人から撮影と録音のお申出がありましたので許可したいと思います、よろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

○会長 ありがとうございます。それでは、本日の会議資料の確認と説明を事務局から願います。

○庶務課長 次第の裏面に、本日の会議資料の一覧を掲載してございます。資料は事前にお送りしておりますが、本日お忘れの方がいらっしゃいましたら、事務局のほうでご用意させていただきます。よろしいでしょうか。

それでは、説明をいたします。

まず資料22-2、前回資料22としてお示しした教育ビジョンアンケートの実施結果の追加報告となります。アンケートは12月18日で一旦取りまとめ、その結果を前回お示ししましたが、その後3月19日まで随時受け付けております。今回お示したのは、12月19日から1月19日まで頂いた回答についての追加報告となります。今回は個人9件、うち小中学生から4件のご意見を頂いております。

その結果、これまでの累計といたしましては個人で546件、団体が5件、合計で551件。うち小中学生からは、456件の意見を頂きました。

今回頂いた小中学生からの意見は本資料の2枚目の別紙1、大人の方から頂いた意見は3枚目の別紙2でお示ししています。

次に、資料24は本日の審議会員の座席表、資料25は本日の区側出席者の名簿となります。ご確認いただければと思います。

次に資料26は前回審議会で委員の皆様から出して頂いた意見、また前回資料19-1から3でお示した、委員や関係者の皆様から文書でご提出いただいた意見を、

事務局で一覧にしてまとめました。ご意見は「今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点」「これからの教育にとって大事な『キーワード』『視点』」「取組の基本的方向性」「その他、審議会のあり方や検討の進め方に関すること」と、大きく4つに分けて表示しています。

なお、資料19に記載のあった各意見については、それぞれ文末に括弧書きでその旨を付記しています。また、資料の一番後ろには、第2回審議会での会長のまとめのご意見を記載しております。

次の資料27は、資料26でもお示したこれまで出された意見を要約し「1 今後の社会情勢予測について」「2 現状の課題」「3 あるべき姿、定義の再設定について」「4 育みたい力・心」「5 全体的な方向性、全体に関わる視点」「6 施策・取組の方向性」「7 具体的な取組①」「8 具体的な取組②」と、8つの項目に改めて整理し直した資料となります。

最後の資料28は、タイトルにありますとおり、他自治体の教育振興基本計画の例や現教育ビジョンの構成に、資料27の各意見を当てはめるとした場合に、こういった対照イメージになるといったものをお示しました。

なお、教育振興基本計画はその構成や記載項目に特に決まりがあるわけではございません。議論に当たっての1つのイメージ図として、今回お示しました。

資料の説明は以上になります。

それから、本日会場にいらっしゃる皆様の席上に「なみすく」という冊子が配られています。この「なみすく」は、年4回全区立小学校に配布されている無料の教育地域情報誌です。区立小学校の在籍児童のほか、校長、副校長、担任教諭、図書室担当、学校支援本部などにも配布されており、全区立図書館でも読むことができます。

本日はこの審議会の取材に来られており、参考ということで委員、傍聴者、事務局関係者に編集者の方からご提供いただいたものでございます。後ほどお目通しいただければと思います。

私からは以上です。

○会長 どうもありがとうございました。それでは、これから本日の議事に入りたいと思います。

以前、この会議で、子どもたちの声を聞く必要があるとのことになりましたた

め、子どもたちにアンケートを取っています。3月半ばまでは回収中ですが、先日の教育シンポジウムで報告するために、12月半ばまでのデータを私のほうでいただいて、院生たちに全体傾向の分析をさせました。

それがついさっき上がってきて、それをお送りして、皆さんに見ていただいて、今日の議論の参考にしていただこうと思ってネットにつなげていたのですが、こういうときに限って私のルーターの調子が悪くなったらしく、直接オンラインで参加の方々にWebex上で接続することができなくなってしまいました。

もし可能であれば、区のシステムに載せられないかと思いましたが……、それは今から可能ですか。あるいはここに写っていますので、これを拡大してカメラに撮っていただければ見えるかと思います。

時間を取らせるかもしれませんが、申し訳ありません。

(接続作業)

○会長 今、杉並区のネットに入れたので、そちらにデータを示しています。これが、先ほど申し上げた子どもたちと保護者の方々のアンケート回答の中間集計のような形になるかと思います。

今日は時間がないので、結果については後から詳しくお示しますが、子どもたちが答えていることのいろいろな傾向が少しずつ出てきていますので、それについてお話ができればと思います。

最初に、基本的に自由記述を分析しましたが、頻出語を20個取ると次のような結果になります。学校のことを聞いているので、「先生」「給食」「シンボルツリー」「楽しい」というものが並んできます。

学校のどんなところが好きかを聞くと、先生が好きであったり、給食が好きであったりと出てきます。これを、言葉相互の関係を捉えるということで、クラスター分析を行って関係性を見ますと、こういう感じになっています。

上から見ていくと「校庭が広い」「校庭が好き」「いい人がたくさんいる」「学校は元気で明るいところ」「シンボルツリーがあってみんなが仲よしだ」「友達と会えて楽しい、遊べてうれしい」「先生がやさしい」ということが多いという結果になります。それに続いて「給食」「楽しい授業」が出てきます。

この結果を、さらに対応分析してみますと、中学生が入っているので少し中学生に引っ張られてしまっていますが、この点については、後からできればそれぞれの

学年の括りごとにまとめ直したいと思います。今の時点、例えば低学年を見ていきますと、学校の好きなところは「先生が好き」であったり、「給食」「遊ぶ」「楽しい」が出てきたり、「シンボルツリー」があったりというものです。あとは「友達がいって楽しい」という点が出てきます。高学年になると、「おもしろい人がいる」「仲よし」「やさしい」「元気」という言葉が出てくるようになります。

中学校になると、中学校のデータがまだ少ないものですからよく分からないところはありますが、少し視野が広がって、校庭のあり方や広さが出てくるようになってきます。以上が、学校のいいところ、好きなところ です。

次に、嫌なことや困っていることはないかを聞きました。ここはあまり多くなく、「特にない」「ありません」がほとんどでしたが、中には「嫌な言葉を言われた」とか、「けんか」「騒がしい気がする」「いじめられている」「上下が決まっているのが嫌」とか、あれこれとあります。あと「おきべんができない」とかいろいろ書かれています。が、「校則が厳しい」とか、細かいことがたくさん出てきます。では、あなたが校長先生だったらどんな学校をつくりたいか、を聞いていくと、どうしても言葉が「学校」を、となるので「学校」がたくさん出てきますが、「楽しい学校」「仲のよい学校」、そして「授業」や「勉強」という言葉が出てくるようになって、これをクラスターで見るとこういう関係となります。「楽しい学校」にしたいというのが、とても強く出てくるようになっています。さらに「楽しくて明るい学校にしたい」と出てきています。

これをもう少し対応関係で見えていくと、小学校低学年は「楽しい」「元気」「勉強」「きれい」とかが出てきますが、高学年になると「自由」「意見を言う」「明るい」「仲よし」という言葉が出てくるようになります。

中学生になってきますと、「授業」が出てきて、さらに自分を中心にして「生徒」「先生」という言葉が出てくるようになって、ちょっとずつ視野が広がって、みんなが仲よく、楽しくて、明るい学校にしたいというイメージが出てくる回答になっています。

次に、住んでいるまちのどんなところが好きかを聞くと、次のような結果となります。人をよく見えています。公園があって、自然が豊かで、という言葉が出て、あとは楽しい、お店がたくさんある、ごみがあまり落ちていないという言葉が出てくるようになってきます。

これをクラスターで見ると、公園がたくさんあって、とか、自然が多くてと、まず環境面に目が行っていることと、人が地域にたくさんいて、みんなやさしくていい人だという回答が出てくるようになっていきます。

さらに利便性の問題で、にぎやかで便利ということや、店が近いとか、あとはいろいろイベントがあって楽しいまちだというイメージを、子どもたちが持っていることが分かってきます。

これを対応関係で見ていくと、低学年の子たちは「友達がいて」「楽しくて」「にぎやかで」「お店が近くて」と言っていますが、高学年になると公園であったり、自分が住んでいるまち、あと「安全」「ごみが少なくて緑が多い」とか、そういう形で意識が展開していきます。さらに中学生になると「地域のいろいろなイベント」「交わり」が出てきて、この三者に共通するものとしては人や、自然が多いというイメージをまちに持っていることが分かってきます。

10年後にはどんなまちになってほしいかを聞いた結果は、当然「まち」という言葉は出てきますが、「人」「やさしい」「多い」「きれいな自然」という答が出てきます。

これもクラスターで見ていきますと、「楽しい」「公園がある」「悪い人があまりいない」「平和である」というものが出てきます。あと、「きれいなまち」「みんなが仲よしでいいまち」「ごみが少ない」「緑がある」「みんなが笑顔なまち」「自然が豊かなまち」が出てくるようになってきます。

これをまた対応関係で見ていくと、低学年の子どもたちは「泥棒がいなくて、犯罪も少なくて、平和なまち」という意見が出たり、あとは「楽しいまち」「事故がなくてきれいなまち」というのが出たりしています。

高学年になると「犯罪などがないまちにしたい」「ポイ捨てがないまち」「みんなが仲よく笑顔で暮らせる」そういうまちをイメージするようになってきます。

これが中学生になると、人のあり方や自然に関わらせて、まちのイメージを描こうとする傾向を強めてくることが分かります。

次に、あなたにできることは何がありますか、10年後そういうまちをつくるのに自分に何ができるかを聞くと、人とかごみとか自分、とにかく「まず自分がやろうとする」ことが出てきます。後から対応関係でお見せしますが、年齢が上がるにつれて「参加して」という議論が出てくるようになります。

例えばクラスターを見ると、まず「ごみを拾う」という、自らやろうとすることが大事だと出てきます。「助けてあげる」「困った人に対して助けていく」という言葉が出てきますが、もう少し年齢が大きくなっていくと、自分から動いていくことから始まって、徐々に「ボランティア」や「活動に参加する」という言葉がたくさん出てくるようになります。

これを対応関係で見えていくとこういう関係になっていて、小学校はグラフがきれいな円を描いて循環していることがわかります。低学年では「自分からまずやってみる」「人を助ける」「使うのを減らす」などいろいろな議論が出てきますが、それが高学年になるにつれて、「自分で活動に参加する」とか、地域のことを考えながら「挨拶をする」「木を植えていく」とか、視野が地域のほうに広がっていきます。

そして中学生になると、「活動」「環境問題」「ボランティアに参加する」という言葉が出てくるようになります。「身近なところからやっていく」ことから、年齢が上がるにつれて社会的に視野が広がっていく中で、最終的には社会の活動に自分が参加していくのだという意識を持つようになっていくのではないかと窺われます。

さらに、お父さんやお母さんはあなたの将来のことに何か言うかと聞くと、「言う」らしいです。それで、どんなことを聞いているかということ、たくさん出てくるのですが、ばらばらと広がりますが、このあたり、「好きなこと」「自分がやりたいことをやりなさい」ということを言われているイメージです。

その中身が、例えばサッカー選手や野球選手、あとは自由に決めなさいと言われていく関係になっているのだろうということが見えてきます。これを分析していくと、小学校低学年の子どもたちはどちらかというと具体的な、サッカー選手やお医者さんとか、野球選手とかが出てきます。

高学年になるともう少し好きなこと、夢を持ちなさいという話から、職業につなげて、中学校になるとそういうものよりもむしろ、もっと自由にとか、もうちょっと勉強しなさいと言われていたり、応援している、と話が変わってくる感じです。全体として、よく言われるということが出てくることになっています。

あなたの将来についてあなたは どう思いますか、お父さんやお母さんが言うことについて どう思いますかということですが、どちらかというと肯定的に捉えている

ことが分かります。

どんな大人になりたいかを聞くと、人について聞いているので「人」はたくさん出てきますが、こういう形です。大人になるということ、仕事に就いてということですが、「明るくやさしい人になりたい」ということが強く出てきたり、あとは自分のしたい仕事に就きたいので、といろいろ出てきたりしています。その中でも、「困った人を助ける大人になりたい」というのが強く出ています。

これも対応関係を見ると、低学年ではより具体的な、先ほどと同じ形で出てきますが、高学年になるにつれてもう少し抽象化されて、「明るい」「役に立つ」「やさしい大人になりたい」、あとおもしろいと思いましたが「お金」も出てきます。

中学生になると、自分ということを考えながら、先生たちの意見を聞きながら、そういう大人になっていきたいと書かれています。

あなたが言われてうれしく思うことは何ですかということですが、「ありがとう」が一番強く出ます。「ありがとう」と言われるとうれしい、もっとやりたくなるという結果です。あと「上手だね」「いいね」「大丈夫だね」と言われるのが一番元気が出ると答えています。

3月までにもっと集まってくると思います。今は基本データが500ぐらいしかありませんので、全体の傾向として見るためにはもう少しデータが必要ですが、基本的には低学年から高学年、中学生になるにつれて視野が広がっていくことと、社会のためという傾向を強く持つようになってくるのではないかと。そういう意味では、杉並の子どもたちは、少し変な言い方になるかもしれませんが、健全に育てていると見てもいいのではないかと思います。そういう子どもたちの願いをかなえるために、私たちはどういう教育実践や教育条件を整える必要があるのかを考える必要があるのではないかと思います。

そういうことの中で、前回、前々回からお話をしていますように、教育振興基本計画の審議会であって計画を立てることになっていますが、10年後の目標を立ててそれを実現するためにどうするか。どういう子ども像を描いて、またはどういう教師像を描いて、そこに行くようにバックキャスト、そこから逆算していく方法で、教育行政のあり方を決めていくということよりは、子どもたちの願いを基本にして、私たちが、社会的な価値としてどうしても外してはいけないものがあるはずで、それを受け止めて、子どもたちのために何ができるのかを議論し、行政計画と

して施策を立てていく。こういうことが求められるのではないかと思います。

譲れない価値としては、例えば、孤立することを放っておくのはいけないことではないかとか、さらには一人も取り残さないという形で、全員が参加できるまちのあり方、それは家計状況、貧困も関係なく、全ての子どもたちが参加して、主役になれる社会にしていく必要があることは譲れないのではないか。

そこには例えばインクルーシブなというので、障害を持った子どもたちも含めて、その子たちがきっちりと社会に位置づけを持って、みんなから尊重されて生きられるまちをつくる必要があるのではないか。翻って、それが健常者の子どもたちにとってもいいまちになっていくということではないのか、ということです。

そのことも含めて、譲ってはいけない価値は譲らないが、あるべき子ども像をつくって、そこに行かなければ駄目なのだという議論はしないでおこうということになっていると思いますので、そんなことを基本にしながら、今日は皆さんから幾つか、今後計画を立てなければいけませんので、そのための議論をいただければと思っています。

私からは、このアンケートのデータについてはこれでご紹介を終えたいと思いますが、そのことも含めて、今日は皆さんからご意見を頂ければと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ここから自由討議といいますか、自由にご意見を頂きたいと思えます。まずは、今私が申し上げたことをもう一度確認した上で、この審議会で何を議論するのかをお考えいただければと思います。それは画期的なことになるのではないかと思います。実は、私はほかの幾つかの自治体の振興基本計画や総合計画の策定委員もしていますが、幾ら私がこういう話をしてほとんど聞いてもらえなくて、そんなことを言っても目標を立てなければ実行できないでしょうと言われて、すぐにバックキャストのPDCAが回らなくなると言われますが、ここの委員の皆さんはそうではなく、何となく分かりますと言ってくださるので、とてもありがたいと思っています。

目標を立てて、PDCAで評価・検証を繰り返しながら行うのは、私があまり話してはいませんが、今は日本の経済界もそれに困っていると言いはじめています。先日も経営者団体の幹部たちと話をしていて、日本の企業は全然イノベーティブではなくなってしまった。なぜかという、アメリカから入ってきた経営計画を作る

という、数値目標を立てて経営していく手法が広がったが、それは経済が安定して成長しているときにはとても効率がよかったが、この変革期にそんなことにこだわっていると、全く何もできなくなってしまうと言うのです。

いまの多くの企業の経営者はほとんどがサラリーマンの方々なので、数字に縛られて達成できなくなると自分の身が危うくなるので、数字を達成することに一生懸命になって、従業員に無理を強いるようになってしまおうとおっしゃっています。いわゆる中期経営計画ですが、それはP D C Aで回っています。

しかもそれは行政のほうでも、あまり悪口を言うてはいけませんが、かなり前に、国が全総というのを作っていたのです。全国総合開発計画というのを作っていて、5年ごとに見直しをしてきました。それが80年代半ばで終わってしまって、地方分権の時代に入ったところで、かつては全総の縮小版が各都道府県の総合計画であり、市町村の総合計画という形で、今の総務省が作ったものをみんなある意味で焼き直して使っていましたが、それをやめてしまったのです。

その後、各自治体で総合計画を作れと言われて10年計画になって、今また法的に教育振興基本計画を作ることになりましたが、それがあある意味ではP D C Aを回すことに連関しています。そこを組み替えることが必要ではないかと思えます。

数字で目標が立てられて、それに縛られていて、それを達成しなければならないと無理をするのです。それで、そうならなかった場合、評価が下がってしまうことが起こると、次の計画を立てるときに小さい計画になってしまうことが起こります。そうすると縮小再生産のような循環になってしまい、結果的に、事業が潰れてしまうことが、往々にして起こっています。

その意味ではむしろ、前にも申し上げましたが、今、企業ではアジャイルと言ったりしますが、A A Rというやり方、いわゆる漸進主義的に、ちょっとずつやってみて、見直しをかけながら、開放系で試行錯誤を繰り返していくやり方を考えたいと思えます。

やり方を変えたいということです。何年後にこれが達成できていることがよいことだというやり方ではなく、むしろ今ある状態を、ちょっとでもよくしようと、みんな以案を出し合って、ちょっとずつ前に進めていく考え方に近いものです。

それは、私たちが日常生活でやっているはずのことです。今の状態に対して、ここがおかしいから変えようと思ってやってみて、振り返ってうまくいかなければ方

法を変えれば良いと思う。そういう形でやっているはずなのです。

そういうものを、議論の中にうまく組み込んでいければ、ということです。先ほど子どもたちがこういうまちにしたい、こういう学校であってほしいと言っているわけですし、さらにその中に自分がそこでちゃんと関わりを持ちながら、社会の一員として役割を果たしていくと言っているとすれば、それを実現するにはどうしたらいいかということ、この振興計画の中できちんと書き込めていければいいのではないかと思います。

私の意見が入り過ぎているかもしれませんが、そんな形で皆さんからご意見を頂ければと思っています。

これから、今まで議論してきたことや、お手元になくて申し訳ありませんが、今日説明しましたアンケートの結果も踏まえて、皆さんから、子どもたちのために大人である私たちが、この10年間何をしたらいいのかを基本に、ご議論いただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

端折ってまくしたててしまいましたので、話しにくいかもしれませんが、どなたか口火を切っていただけるとありがたいのですが、いかがですか。

○委員 前回私は受験の話を出して、皆様に愚痴というか、親の苦悩を披露してしまいましたが、家に帰ってからもずっと自分の中で悶々としていて、教育の現実と理想の隔たりが非常に大きいことを改めて考えました。その中で重要だと思ったのが、今回会長がお示ししてくださった、こういった現場のヒアリングであったり、もちろん先生方のヒアリングであったり、現場で当事者の方々がどう思っているかということ、吸い上げることが大事だと感じました。

それがノルマになってしまわないようにということ、私もすごく感じていて、目標を立てるとノルマが出てしまって、それを実現しようとなってしまう。私も、そういうプレッシャーみたいなものを感じがちなので、そういった意味では、今、会長のお話を聞いて考え方を改めて、達成しなければいけないのではなく、願いをかなえようとする方向性で行くことは非常に大事だと感じました。

その上で、教育・学習・地域活動についての強制や格差、保護者や教師の様々な負担、生徒たちの自己肯定感の低さといった課題を、解決に向けて政策を進めていく中では、楽しそう、やってみたいというマインドの部分から明るい方向に打ち出していく思考がいいと思いました。

原動力がプラスに働いたほうが、多分みんなの中で面倒だ、やりたくないな、どうしようという考えではなく、言いたいことを言えばいいのだよというマインドを進めていければと感じました。

そこで私は、前回委員からご提案があった人材バンクについては、私も公募作文に、区民が多方面から教育に関わる機会として、教育のマッチングサービスシステムみたいなものがないのではないかと書いたので、それに通じる意味があって、いろいろな種類の方々が現場で理解し合う、問題を抱えている方にも寄り添っていき、いろいろな考え方の方がミックスされていいと感じました。

加えて、前回委員がおっしゃった、学校で地域の人々が一緒に学べて、仕事につながる仕組みづくりがされると、さらにいい循環ができるのではないかと感じました。以上です。

○会長 ありがとうございます。今までも、学校に多様な人が入って行けるようにしたらどうかとか、いろいろなご意見があったと思いますが、そのことにつながるご意見だと思いました。

ほかにいかがですか。私たちに何ができるかというスタンスでお話を頂ければと思います。

あと、オンラインの方も挙手をしていただければと思います。画像がうまく出ない委員は、お声がけいただければと思います。お願いいたします。

○副会長 資料22-2を拝見して、456番に「先生がひどいです。威圧的に生徒を抑え込む」云々という発言はすごく深刻であると同時に、斜めから見れば、こういうことがきちんと発言できたり、区の正式な資料に載せられたりできる環境をもっと作っていかなくてはいけない意味においていうと、これは非常にいい例です。しかし現場としては、これは非常に深刻な報告になっていると思います。

委員がおっしゃったことだと思いますが、子どもの権利条約は学校にはほとんど実際の問題として入っていったいないという部分があって、子どもの権利はこの際きちんと学校現場に入れていくということは、最低限の出発点ではないかという気がしてお話を伺っていました。

同時にしんどい声、もしくは不満の背景にあるものが何なのかを深彫りできていくような、つまり言わせて言いつばなしになっただけでは意見表明権になりませんから、意見表明権は受け止める大人がいることによって意見を表明することになるの

で、英語で言うとThe opinion to be heardで、聞かれるべき権利。受け取る大人がいるからこそ、意見表明になります。でないと言や、言わばなしになるので、聞き取る大人の側の仕組みをどう作るのか、非常に大事なのかなという気がします。

そういう意味において言うと、特別支援教育などでも、理念と現実にかけていることのギャップは、杉並区の親御さんの話を聞いている限りでは深刻な問題があるのではないかという気もしております。

例えば合理的配慮がつかないとか、通常学級で学びたいときに認められない、もしくはそこに必要なサポーターがいたり、つかなかったりする問題、僕が行った学校は杉並区内の小学校で、率直に言ってびっくりしたのは特別支援学級が校舎の一番奥にあって、PTA会長ですら行ったことがない。PTA会長と一緒にきましたが「ここにあるんですね」というところから。つまりそういう意味で言うと、本来協働学習や交流学习が制度化されているのかもしれませんが、開かずの間みたいになっているとか、そういう意味において、現実に理念が立ってきたと言っても、実践が追いついて来なかった部分があるかと思います。

これは杉並区に限らずどこでも起きていることだと思いますが、そういう意味において、弱者の声が丁寧にすくい取られていく仕組みが整備されていく必要がある。そのときに、インクルーシブ教育が、障害児だけの問題ではなく、様々な社会的マイノリティ、もしくは社会的弱者の包摂、つまり経済的な弱者、ニューカマーの子どもたち、様々な弱者の包摂を意味する言葉として、インクルーシブ教育というのが杉並区の中で共有されていくことが大事かなと思っています。

○会長 弱者、特に障害を持った子どもたちもそうですが、子ども本人が社会的な弱者でもあるというか、言い方に語弊があるかもしれませんが、子どもの権利条約に規定されている様々なことが、日本の社会になかなか入っていない。

もう1つは、子どもたちは政治的な権利を持たないわけです。大人から保護されるものとして置かれているはずですが、そこは大人が子どもたちの声を聞かなければいけないのではないか。その意味で今回初めての試みですが、先ほどのアンケートを子どもたちに取って、やってもらったということなのです。そうすると、それなりにきちんと書いてきてくれる。いろいろなことを考えているはずなのです。それを私たちが、彼らが言っていることを受け止めながら現実なものとして作ってい

くのかを問われていると思います。

1つは、先ほど副会長がおっしゃったように、子どもの声を聞いて、実践にきちんと生かしていくことが必要になってくる。それを政策的に、区の行政としてきちんと保証することが必要になるとは思います。そこにはお金がかかるとか、様々な制約・条件がかかってくると思います。それに対して、私たちが地域にいる大人として一体何ができるのか。

さらには今のコミュニティ・スクール、地域・学校協働活動が提唱され、地域と学校が車の両輪になって子どもを育てていくことを、大きな方向性として国が示しています。

これは別に区の行政責任を免除するという議論ではありませんが、行政に頼ってやっていくだけの話ではなく、社会全体が変わっていかねばいけないだろうと考えると、私たち地域に住む住民がどういう形で子どもたちに関わるのか、また学校に関わるのかといったことも、ここで議論できればと思いますが、いかがですか。今のことに関わって、何かご発言がありましたらお願いいたします。

○委員 地域とのつながりというところですが、今の子どもたちは、コロナ禍もあっていろいろなことに我慢を強いられている中で、前回「センス・オブ・ワンダー」という言葉もありましたが、好奇心を育てることが今、すごく難しい状況なのかなというのは保護者としても思っていて、好奇心の芽を育てることの必要性・重要性をすごく感じています。

目標や夢を見つける手助けを、私たちの家庭や教育の場でやっていくことが大切だと思っていて、それにはいろいろな経験させる。それこそ地域の人や学校とかで、いろいろな仕事の方に話をしに来てもらうのでもいいですが、いろいろな方と触れ合うというのが、今の状況でどこまでできるか分かりませんが、いろいろな経験をして興味を持ったり、夢まではいかななくても好奇心を育てる。そしてちょっとワクワクしてくれるというと、それで学校が楽しいとか、人生までは行かないですが、楽しいなと思ってくれる。

いろいろな経験をさせて、それを見守る大人たちがいる安心感を私たちが与えることで、伸び伸びと言いますか、そうやってどんどん芽が広がっていくのかなというのを、前回休みでしたが議事録を読んで、このアンケートとかも見て感じました。

そこで学校や、家庭もそうですが地域とのつながり、人にしかできないことがあるので、そこは大切で、これからも重要になるのではないかと感じました。

以上です。

○会長 子どもたちの好奇心を育てることと、大人がどう関わるか、ということ。前回、私がお話をした「センス・オブ・ワンダー」ですが、レイチェル・カーソンは、子どもたちのセンス・オブ・ワンダーを育てるのは共感的な他者だと言っています。子どもが一人いるだけで勝手に育つのではなく、一緒になってびっくりしてくれる、「すごいね」と言ってくれる他者が必要だと言っていますが、他者としての大人たちや、地域の私たちがどうあるべきなのかという議論にもつながるのではないかと思います。

ほかにいかがですか。

○委員 今の関連のお話で、大人は何ができるかを考えていましたが、地域の大人という言葉を使ったときに、大人自身が地域につながれているか、つながれていないかという観点があると思いました。

私自身が杉並区の出身ではなく、結婚して子どもが生まれる前ぐらいに杉並区に引っ越してきて、そこから区民になりました。杉並区に来たときは、地元にも一人も知り合いはいませんでしたので、地域の大人と言われても、人口的に大人はたくさんいても、地域につながっていない大人もたくさんいるのかなという気がしています。

私自身は子どもが保育園に行って、保育園のパパ友、ママ友とつながり始めて地域に友達ができて、小学校でも保護者同士でつながりができて、初めて杉並区民だと感じ始めました。

子どもを中心に考えて、大人たちが見守り、育てることを手伝うと言ったとき、地域の大人というと、何となく昔から住んでいる人たちだけみたいなのところもあるかもしれませんが、大人たちのコミュニティへの巻き込み方というか、私自身は子どもが地域のパスポートというか、それを通じて地域にたくさんつながりもできまして、最終的にはみんなで「親父の会」を作ろうとか、いろいろなコミュニティもでき始めていますが、地域の大人はそもそもつながっていない人たちが半分以上だと思うので、その巻き込み方も意識しながら、それを含めて子どもを中心に、何かを考えられるといいのかなと思いました。1つの視点としてコメントしました。

○会長 大人も孤立しているのではないかという話だと思いますが、もともと地縁的な関係のない人をどうするのか。むしろそういう方々が増えてくる中で、大人が関わろうと言っても難しいのではないか。

逆に、子どもに関わろうという議論をしていくと、大人がいかに地域から切れてしまっているかが見えてくるかもしれません。そこも含めて、大人をどう巻き込むのかも絡めて、子どもたちの願いをどうかなえていくのか。子どもたちにどう関わるのかを議論できればと思います。

ほかにいかがですか。

○委員 私も今の意見は非常にいいなと思いました。大人をいかに巻き込むか、大人は何ができるのか。大人のネットワークをしっかりと作ることが子どもたちの安定になり、地域が盛んになっていくということなのだろうと思っています。

そういうふうに見ると、学校の立場で言うとPTAの活動が非常に衰退していますので、委員がおっしゃったとおり保育園、小学校、中学校での大人の活動を活性化していくことにより、地域の子どもたちにとってできることが非常に多くあるのではないかと思います。

それから、私は会長がおっしゃったことを自分なりに咀嚼しようと一生懸命考えているが、よく分からないのは教育振興計画を立てようというときに開放系で試行錯誤しながら、いわゆる走りながら子どもたちのためにできることを考えていこうというときに、まとめ方のイメージをどうするのか。考え方そのものはいいと思いますが、どうしたらいいのか整理がつかないので、その辺で皆さんのお知恵をお聞かせいただければと思います。

以上です。

○会長 大人をどう巻き込むかという議論をしながら、子どもたちにどう関わるのかといったこともぜひ議論できればと思います。

まとめ方については、私も実は、特にイメージがあるわけではなく申し訳ありません。ただ、目標を何か決めてそのためにということではなく、こういうふうやっていきましょう、10年間はこれでいきましょうという書き方になると思います。

これは行政側の方々には厳しいお話になるかもしれません。ではどうすると言われたときに、苦しいかもしれません。議会であれこれ言われたら、とお考えになるかもしれませんが、何年後にこうなっていなければならないという議論ではなく、

むしろ一步一步前に進んでいきたいと思いますという議論にしていくことが必要ではないかと思えます。

なぜかと言えば簡単な話で、10年後の社会はどうなっているか全く分からなくなっているからです。今回のコロナもそうですが、人工知能がどう発達するか誰も分からないのです。

一時言われた2040年にシンギュラリティーが来る、つまり人工知能が人間を超えられると言われましたが、言われなくなりました。超えられないことが分かったからなのですが、前にも申し上げましたが、2030年ぐらいには変わることがいっぱい出てきてしまう。今の職業の5割ぐらいが、人工知能が自動化して人を雇わなくなると言われていますから、今作っている計画年度が終わる頃には、そういう社会になっているかもしれません。ただ、分かりません。

その意味では、一步一步確かめながら次へ行く手法を取っていかないと、子どもたちを枠にはめてしまって、外れたときにどうするのかという議論にもなってしまいうだらうと思えます。

口が過ぎますのでこの辺りにしますが、ご意見はありますか。

○委員 冒頭、先生からご説明いただきましたアンケートの内容を聞きまして、杉並区の子どもたちは本当に健全に成長していることを改めて実感しました。

コミュニティ・スクールについては、早いもので私のところはもう16年目になります。区内全校が随時コミュニティ・スクールになっていますが、スタートした時点での対応にはいろいろな状況があって、各校それぞれ濃淡はありますが、いずれも地域の方は本当に献身的に、学校に対して協力してくださっていると思います。

これまで、地域の側から子どもたちに一生懸命やっていった部分はあると思いますが、ここから10年の中では、子どもたちが地域に対して与えられる機会を、徐々に増やしていければいいかなと思っています。

これまでのご意見の中で、好奇心や探求心という言葉がキーワードとして出てきましたが、子どもたちが興味を持って学習し、趣味を追い求めたときに、それを生かせる場所があればいいと思います。自分たちが蓄積した知識を生かせる場所が、コミュニティ・スクールであつたらいいのではないのでしょうか。

○会長 子どもたちに何ができるかということと、子どもたちが何ができるかという形で議論を展開してはどうか、視点を変えてみてはどうか。例えば、探求心や好

奇心を発揮できる場所みたいなものをどう考えるか。そのときに、コミュニティ・スクールのあり方の議論もできるのではないかというご発言だったと思います。

ほかにいかがですか。

●●委員、お願いいたします。

○委員 ●●委員のお話を伺って、私もコロナ禍と言う特異な状況の中で出てきた子どもたちのアンケートの結果が、子どもの持っている未来の学校や自分のイメージというものが、非常に健全に持たれているのだなと感じました。

計量テキスト分析で、「先生」という言葉がたくさん出てきたことから、教員の役割が子どもにとってよくも悪くも極めて重要だと感じました。とはいえ、学校はあまりにも多くのものを抱えていますので、学校組織としてはかなり限界に近いと思っています。教育振興基本計画は学校教育だけのものではありませんが、この中で学校教育の担う範囲は明確にしていくべきと感じました。

インクルーシブや子どもの権利を認めていくことは、非常に大切なことです。それを許容する学校組織の環境が、今後必要になってくるだろうと思います。理想はそのとおりだが、実際学校に余裕がない状況の中で、どのようにしていくかということを考えなければならないと感じます。

地域との協働や連携は子ども、保護者、地域の願いに応じて教職員と地域が一体となって進めていくもので、これは杉並区では今のところうまくできていて、今後重視していかなければいけないと思っています。

一方、保護者や地域が子どもに関係する対応について学校に頼り過ぎるという面が極めて大きいと思って、そこに教員のリソースがかなり割かれています。たまたま配置されたに過ぎない教職員が全て行うのは極めて難しいので、教員が教育活動にかける時間、子どもの夢を実現する、子どもの持っている未来のイメージを実現させるための仕事をもっと大切にさせたいと思いますので、そういうものを絞り込んでいくことが、施策を実現するために重要なのではないかと感じました。

以上です。

○会長 ちょっと前、副会長から断捨離という言葉があって、学校が抱えているものをもうちょっと断捨離できませんかということであったと思うのです。それにもつながってくるのではないかと思います。

先生方が今、多忙であることは皆さんご存じのとおりで、学校はある意味では福

祉的なものまで抱え込んでしまっている面が多分にあります。特に貧困ですとか、様々な格差の問題を、学校が一手に引き受けてしまっています。

その中で先生方が本来しなければいけない仕事、子どもに向き合って、教育の専門職としてきちんと役割を果たすこと、このことがしにくい状況だと思います。そうしたものを見直して、先ほどの話のように子どもたちの思いを実現できる、子どもと一緒に探求していける先生が、生き生きと活躍できる場所に学校をしていく必要があるのではないかと思います。

それを実現するものとしてコミュニティ・スクールが構想されていたはずですが、杉並区はうまくやっているとありますが、いろいろな地域の話を書き聞きますと、逆に地域が学校に文句を言いに行く場所になってしまっているところがたくさんあって、先生方の負担が余計に増えたという議論もよくありますが、そうではないはずです。地域と一緒にやってというのは、地域が責任を取ることもありますから、先ほどの大人が孤立しないようにということも含めて、教育改革が社会全体の見直しを求めているのだとも思います。

ほかにいかがですか。

○委員 前回では、地域の課題を強くお話しし過ぎてしまったと思って反省いたしました。教育ビジョンということで、明るい未来に向かって、私たちがどんなふうにしていけるのかをもっと考えていかなければいけないと思いました。委員のお話の中でも、今後CSが子どもたちの活躍できる場を創設することも必要ではないかとのお話がありました。私もそこは強く思います。

先日高円寺学園のCSがようやく立ち上がり、そのときに主管の先生方も一緒に参加しましたが、その席で先生から、高円寺という地域を学びの場にして、子どもたちの教育を進めていきたいというお話が出ました。そういうところで、私たち地域が力になれるのかなと思いました。子どもが地域の中で、自分たちにこういうことができたという思いが、地域を愛してくれる力に変わっていきたくと思っています。

今回「なみすく」で、私がやっております青少年委員を特集していただいておりますが、青少年委員としても子どもたち、特に中学生が輝ける場を作るために活動しております。教育ビジョンの話合いに参加している中で、より強く、もっと私たちもそういう場を創設していきたいと思っています。

話が変わってしまうかもしれませんが、なぜ学ぶのか、なぜ勉強するのかという問いに対して、「学校は幸せになるために準備をするところ」という表現が、私は誰にでも分かりやすく、地域の人たちや保護者、子どもから大人まで、みんなが分かりやすい表現だと感じました。

人生100年時代に突入する中、幸せに暮らしていくために学び続けていく力が必要だということでは原動力になるのが、不思議に思う気持ちやワクワクする気持ち、楽しい気持ちで学んでいくことができる学校を作っていかなければいけないと思いい、そこを地域がどこまで支えていけるかということが大切かなと思っています。地域の人や触れ合いの中で学びの機会を作っていくことが、とても重要だと思っています。

あと、誰も取り残さないということでは、副会長のおっしゃるようにPDCAが働いてしまうことで可能性の芽を潰してしまうのではないかとこのところが懸念されるので、評価するのではなく、子どもたちの頑張りを認めてあげられる仕組みが学校の中にできていくといいと思っています。

幸せとは一人ひとり価値観が違うものなので、これが幸せとは決められないと思います。一人ひとりの幸せの価値観を認めて、後は自分のこととして、いろいろなことを考えていける大人であり、子どもであり、その先に思いやる気持ちが育っていくのではないかと思いますので。そのような仕組みができるといいなと思いました。

○会長 一人ひとり違うことを価値にしていくというか、違っているからこそ一緒にいられる、違っているからこそ比べてはいけない、だからこそ平等なのだという価値観。

今まではどちらかというともみんな同じだから平等だと扱ってきましたが、そうではないのではないかと思います。そうしたものを学校の1つの価値として置いていくことで、子どもたち一人ひとりが違っていることを認め合い、たたえ合う関係を作っていく。それこそが実は評価になるのかもしれない。

今、評価というのは、ある基準を作って、尺度を1本にして、その基準から上か下か、その基準に比べるとどれくらいの点数かということによって序列化してしまうように働いてきましたが、そうではなくお互いに違っていることをたたえ合う関係で評価し合うというか、「すごいね」と言い合うことができる関係ができるということ

が大事ではないかとおっしゃったと思います。

ほかにご意見はありますか。

○委員 私は福祉の立場なので、先生のアンケート結果が出て、杉並の子どもたちの、結果としては大変健全な育ちがなされていると思いますが、福祉の立場からするとさらに、アンケートにも答えられないような子どもたちがいるのではないかと。先ほどの、一人も取り残さないというところでは、既にアンケート等にも参加できなかった子どもたちの声なき声を、どう拾っていけるのかも必要になってきているのではないかと。

まさにそういう中で、自分のところでも小学校の教員免許を出していますが、社会福祉学部の中で小学校免許を出しているのが、我々のスローガンは福祉の視点から教育を学ぶということ。先ほど会長もおっしゃったように、福祉の視点は一人ひとりの違いを認めていき、自己実現を目指していく。自己実現とは、自分らしく生きていける。そして、自分自身が最終的には生まれてきてよかったと思える日々を、生活、社会、暮らしの中で実感できる生き方を保証していくことが福祉の視点。それを教育でどう保証できるのか。

会長が当初から言っているように、子ども像ではなく子ども観、どういう子どもたちを私たち大人が、社会が共有していくことが大事で、そういう中であって虐待問題に対応すると、子どもが大変きつい状況にある一方、親を批判するが親自身も聞いていると大変厳しい子ども時代を過ごしてきて、そうせざるを得なかった。そこを責めていたら、家庭自体も救われない。

無知は差別、偏見を生むし、差別、偏見は憎しみを生むのであれば、そういう現状・背景も、私たちは地域社会の人たちにとんでもない親ではなく、そうせざるを得ない厳しい状況の中にある親だから、地域の中で理解者として、そこにサポートを、厳しい目ではなく暖かい目を社会の中で持って行ける。

子どもの非行も不登校も含め、とんでもないのではなく、そうせざるを得ないという、なぜ子どもが学校に行けなくなっているのか、なぜ非行に走ってしまったのか、その背景をしっかりと見ていき、理解者になっていく。

自分の福祉の視点からは、そういう背景を社会の人々に理解してもらうことが、我々の役割として必要ではないかと思っています。そんなところをお願いしたいと思います。

○会長 福祉の視点から、お互い認め合うこと、批判し合うのではなく、むしろ受入れ合うというか、どうしてそうなってしまったのかという、ある意味では想像力を働かせながら配慮し合う関係を作る中で、親御さんたちも含めて、大人も含めて、お互いを認め合える社会が実現できるのではないか。その基礎としての学校教育があるのではないかとの話だろうと思いますが、そのような形で、地域と学校の関わりの在り方ですとか、大人同士の関わりの在り方も含めて、子どもへの関わり方を議論できればと思います。

○委員 委員と同じことを発言しようと思っていました。アンケートの結果は大変健全で、向かうべき道を示してくれていると思いますが、こちら側の問いに答えてくれるのは前向きに生きている人たちなので、そういう答えが集まるのは当然だと思います。声を上げることができない人はどう思っているのか、声を上げる必要さえ感じていない人、会長がおっしゃった想像力を働かせることができない場合は、今こころか考えられない子ども、私たちが抱える難しさ、悩ましさという現実を、考えなければならぬ。現場の先生方が一番ご存じだと思います。

先ほどから、学校教育のことを考えたら手いっぱい断捨離も考えなければいけないというお話が出ていますが、教育の一方の主演である先生方はどう感じていらっしゃるのか、生の声を聞きたいと、議論を聞きながら感じました。

委員の中には校長先生が代表していらっしゃるのですが、現実はどうなのか。子どもたちがいい学校にしたいと思ったときにどんな難しさがあるのかということも、一方で知りたいと思いました。それが1つ。

ビジョンに一体どういうふうに記載していくのかという具体案を、この後提案されている資料27や28について話合いが進んでいくと思いますが、27や28ありきで議論を進めていくのかも教えてください。

以上です。

○会長 初めての試みで子どもたちにアンケートを取りましたが、それに答えられる子どもと答えられない子どもがいて、答えられない子どもの意見がどうしてもこぼれてしまうので、私たちがそこでどれくらい想像力を働かせるのか問われていると思います。

答えない子どもたちの中には委員がおっしゃった、答える必要を感じない子どもたちもいるのではないかということなのです。そういう子どもたちを含めて、意見

をどう反映させていくのかといった課題があるだろうと思います。

さらに学校の中の問題、先生方が一体どう受け止めていらっしゃるかということも、もう少しちゃんと知っておく必要があるのではないかというご指摘だろうと思います。

資料27と28の使い方の問題ですが、今後のまとめ方に対して特に28は従来の作り方を前提に、前回のビジョンの達成度等も含めながら、新しいものの項目立てをしようというので、たたき台として出していただきましたが、従来のような作り方をしないのであれば、新しい枠組みを考えなければいけませんので、これは1つの参考事例として考えていただいて、今回の新しいビジョンに関してはこういう記述をするということを、皆さんからもご議論をいただいて、まとめ上げていければいいと思います。これに捉われることは全くないと思いますので、その点をご理解いただければと思います。よろしいですか。

○委員 今までたくさんご意見を伺いながら、最後に発言するのはすごく荷が重くて嫌ですが、まとまりませんがよろしく願いいたします。

アットランダムになりますが、ビジョンのまとめ方では、「あるべき姿」というより、「ありたい姿」としてまとめることになるのだろうと思います。そうすると「ありたい姿」を考えていくには今あるリソースをしっかりと押さえないと、次の一歩というところに策定できないだろうと思うのです。例えば健全な姿とありましたが、子どもたちのこれらの発言は確かにそうでも、それを全部、健全とまとめてしまっているのかということもあり、それが今の声なき声につながるのだと思います。

杉並が持っている教育のリソースは幾つもあるはずなので、それらを学校教育の部分と社会教育の部分、地域一般の部分など今ある行政の情報を集約していただくと、そこから次のスモールステップでの目標設定で行けそうな気がしました。

次に、大人ですが、学び続けると楽しいという体験を、学校の先生も含めてどれだけ子どもたちに背中では示しているのかということですが、私の教員人生を支えてきてくれた言葉は「子どもが成長し、その家族が目覚め、先生も人として仕上げられます」という言葉です。

これは読み人知らずの言葉ですが、先生自身が成長していくことにもっと貪欲になるというか、先生も学んでいる。自分も学んでいる。学ぶのは楽しいんだ、それ

は学校だけではなく、自分のお父さんもお母さんも学んでいる、地域の人たちはこんなふうに学んで、自分たちにいろいろなことを教えてくれるのだという機会が、杉並の中で作られていくことが大事なのだろうと思います。

そのときに、違う人たちが共生していくということを考えると、実は共生はすごく大変なことだと思うのです。みんなで仲よしこよしになることではない、違う人が一緒に過ごすのはとても大変。権利と権利はどうしてもぶつかり合う。ではそこで、どういうふうに折り合いをつけるか。

大人に何ができるかと言うと、そういう折り合いのつけ方のスキルを学校で教えることはできるだろう。地域でもできるかもしれない。そこがファシリテーションという言葉で言っている内容にあたります。

共生社会を目指すけれども、それは決して生やさしいものではないことも私たちは知ってなければいけないと思います。そのときのスキルも、子どもに伝えたい。教え込みたいと言うよりは伝えたい。そういうことだと思います。

評価の話も出ました。学校教育に評価はつきものかもしれませんが、評定と評価は違うと思います。評定は定められているからつけなければいけません、評価と言うよりはむしろフィードバック、私はずっと特別支援学校に務めておりましたので、特別支援学校の通知表には何ができたかは書きますが、できないことは「難しい」と書いてもらうようにしていました。「これはできません」ではなく、今は「難しい」と。

どういう意味かと言うと、フィードバックです。この子どもはこういうところに行きたいが、今はどの辺にいるというフィードバックをしていく。そういう言葉が、もっと学校教育の中で広がってもいいのではないか。

先生たちも、研究授業をすると、授業評価となります。そういう評価という言葉が大好きです。私が校長のときには評価という言葉は使わないでください、授業を見たら授業のフィードバックをしてくださいとお願いしていましたが、そういう文化も、変えていかなければいけないところがあるのかなと。

今はいろいろなことがあります、私たち自身のあり方が、この教育の振興計画を作ることによって、こんなふうに変わる可能性があることを我々が知ることができれば、それはとても楽しくうれしいことで、どこかが子どもたちだけではなく、地域にも伝わってくる。そんなことを皆さんのお話を伺いながら考えました。

杉並は済美養護学校という特別支援学校を独自に持っているところなので、済美養護の地域は区内全域ですから、その区内全域の地域を私も自分がいた頃にしっかりとまとめ上げられなかったというじくじたるものがありますが、そこにいろいろな人材が集まって、その人たちがいろいろなことを考えている。福祉的なことに関わっている卒業生の保護者はとても多いです。その人たちが杉並をどう見ているのか、もう1回洗ってみたいと思いました。何も自分の住んでいる周辺だけが地域という必要は全くなく、そういう学校もあるということ。

あとは済美養護が1日も早く地域運営、CSになってほしいと思っています。

まとめりませんけれども、そんなことを考えています。

最後に、冒頭のほうで副会長が言われたインクルーシブで言えば、いろいろな課題はありますが着実に変わってきていると思います。就学の相談でも理念と現実のギャップはあるのですが、少なくとも私たち就学相談を受ける立場は保護者に考えを変えるような説得はしません。説明はします。でも説得しないことを続けています。

これがどういうふうに実を結ぶかまだ分かりませんが、ある1つのあり方に押し込めるのではなく、いろいろなあり方を認めていけるのが、価値観をどう社会が変えていけるのかにもつながり、でもそれは一遍に変わるのではなく、小さな一歩から始まるのだらうと思いました。

長くなり申し訳ありません。以上です。

○会長 特に福祉というか障害児教育の観点からだと思いますが、多様性を認め合うことの難しさも含めて、お互いに認め合っていく、違いを認め合っていく、受け入れ合っていくことの重要性をきちんと伝えたいということ。

もう1つは、学校のあり方は変えていかなければいけない、地域も変わらなければいけないということだと思います。その中で、違いをベースにしながらお互いがともに、そこにある形で生きていかれるのかを考える必要があるのではないかと。

教育実践のあり方も、評価ではなくむしろフィードバックを受けながら、日々改善を続けること。その関係の中で、先ほど委員がおっしゃったように、子どもが成長し、家族が目覚め、教師が成長するということがありました。楽しさを共有していくことが必要ではないかということでした。

そうしたことも、この社会の中ではどちらかというところではなくなくなってしまっ

ているのではないか。むしろ、いろいろなものがある種実用的にというか功利的に考えられてしまっていて、役に立つか立たないかで白黒分けられることになってはいないだろうかということもあると思います。

そうではなく、むしろ互いが影響を受けながら高め合っていくことの楽しさやうれしさが、学校や社会の中で実現できる在り方はないか。例えばアクティブ・ラーニングが盛んに今言われていますが、その和訳は「主体的で対話的な深い学び」となっていて、対話の関係です。権利がぶつかり合ってお互いに潰し合うのではなく、対話的にそれを組み替えていきましょうという、その過程で深い学びが起こることになると言っています。対話の関係をこの社会にどう実装していくのか、作っていくのかといったことも問われていると思います。

○委員 対話の関係は対等な関係でしか結べない。そうすると、先生と生徒の対等な関係性をどう作っていくか、意識していくかだと思います。

今日は「なみすく」が配られています。最後のページにふれジョブ訪問記があります。これは私たちの仲間と一緒に、地域でしている活動です。障害のある子どもを地域のサポーターが週1回1時間サポートして、地域の事業所で就労体験していくのですが、ここでのサポーターと子どもの関係は対等です。

知的障害のあるお子さんたちですが、本当に対話的です。子どももサポーターを受入れ、サポーターも子どもを受入れる対等な関係で進んでいく、それは多分いろいろなところで実現できることで、そういった可能性も地域の中にたくさんあります。前回、前々回で地域の中のリソースという話も出ましたが、障害のあるお子さんたちとの活動場面も掘り起こしていけるといいと思います。

○会長 対等な関係、上下ではないということですが、ここで対等とはどんなことなのかということも議論しなければいけなくなってしまうかもしれません。平等なのか、対等なのかも含め、言い方を変えれば、同じだから平等なのだということで、均質だから平等だという関係でいくのか。違っていることを認め合うからこそ実は対等なのだと言えるかということにも関わってくるだろうと思います。そのことを含めて、ご議論いただければと思います。

委員、ようやくお顔が見えましたが、一言ご発言をお願いできますか。

○委員 参加していて私自身が思ったことは、地域と聞きましても抽象的というか、範囲が広過ぎて、どこが地域となると結構難しいと思いました。

学校の中でも、子どもたちが地域の方と関わると言われても、ではどのように関わればいいのか、きっと生徒は思います。そういうところがまず、子どもの中の委員決めという部分で、生徒会みたいなものがある、学校の中に保健委員や生活委員などの委員がありますが、その中に地域の方たちと関わっていける窓口の委員のような部署を学校でも設立していただけると、そこへ地域の方に持って行きたい話や、地域の方とのつながりができる機関みたいなものを学校側で作ってもらえれば、そこに地域の方たちが、子どもたちの意見を取り入れてもらえる機関が学校の中にあって、普通にお茶を飲みに来ている人たちとか、地域で時間がある方や保護者の方、いろいろな方がいらっしやると思いますが、そういう方がこの日とこの日という感じにいる場所を学校にも設置すると、そこに言いに行けるとか目に見えるシステムや支援が明確になると子どもも地域も関わって行きやすいのかなと、話を聞いて思いました。

今はPTAでも保護者活動の代表の場になると思いますが、そこは子どもたちとPTAは違うと思うので、子どもたち自身が地域の方と何かできる、何かをしてもらいたいということがやっけていける関係性を学校側からも、子どもにそういう、委員会みたいなものを作ってみませんかというの、動きとしてはいいのかなと思いました。

以上です。

○会長 とてもありがたい発言です。今まで随分抽象的な議論をしてきたらと思うのですが、そろそろ具体的なものを行政的には施策として作っていかねばいけないということがあるものから、今お話を頂いた、学校の中に子どもたちの生徒会や児童会みたいな組織に、地域との窓口になる組織を作ったらどうかというご発言があったりですか、PTAのあり方を組み替えたらどうかということにつながっていくことで、学校と地域、子どもたちと大人たちをつなげられる、1つの制度みたいなものが作れないかというご発言だったと思いますが、そういう具体的な、今までの私たちの議論を背景に置いて、こういう具体的な施策があったらどうかとか、そういうご提言というか、お考えがもしありましたら、お出しいただければと思いますが、いかがですか。

例えば住民の皆さん同士が、大人が孤立しないように何かをしようというときには、地域で何をするのか、「親父の会」みたいなものを組織するという議論になる

のか、学校を核にしながらか地域全体が、子どもを間に置きながら結びつくためにはどうしたらいいか。

私の専門の観点からいけば、社会教育主事という国家資格がありますが、これはもともと教育委員会の中にいるだけでした。ただ、これは今年から社会教育士という称号が出ることになって、専門職として地域でいろいろな活動をしてくださいと位置づけが変わってきました。そうした人たちをもっと育成して、配置するという議論ができるかもしれません。そういう、皆さんのお考えの中に具体的なイメージがあれば、これから出していただければと思いますが、いかがですか。

副会長からお願いいたします。

○副会長 具体的な施策ではありませんが資料28、従来は基本目標があつて、目指す教育や人間像が書かれていました。それに対して、今回会長のご提案から始まっている話で言うと、多分教育行政が、多様性など尊重すべき価値が最初に来るのではないかという気がします。

子どもたちが目指すのではなく、行政がそういうものを大事にして施策を展開するという行政として遵守すべき価値が、インクルージョンや共生社会だと思いますが、そういうものが書かれるというイメージがある。

その次に、目指す人間像ではなく、杉並区立学校や杉並区の生涯教育が果たすべきミッションの話になる気がします。その下の施策が、ミッションを実現するためのプロセスみたいな、行政が何をしていくのかということで、目指すべきものは尊重すべき価値に向けて、何を実現していくのか。その中には、●●委員が言われた教員にとって働きやすいものも入っていくと非常にいいのかなという気がしました。

○会長 まとめ方についてのご提案だと思いますが、今までは現状の把握があつてこうすべきという話が出てきて、あるべき子ども像みたいなものが出されてきて、それに向けて施策をどう組むかという組み方になっていましたが、そうではないという議論をしていますので、行政計画ですから、行政の基本的な価値にはどんなものがあるのか。先ほどの議論だと、一人も取り残さないということやインクルーシブ、孤立をさせないということはあるだろうと。

これは行政という、当然私たちが税金を払って、自治体を作っていることにも関わってくるわけです。社会をきちんと生き延びるためにしていくということになる

と思いますので、そのための価値をどこに置くかという議論をしていく中で教育、杉並区立の学校または杉並区の施策としての生涯学習や社会教育が一体どういう、その価値を受けながら展開されるべきなのかというミッションが書かれていく。そのミッションを実施するために、こういう施策を取りますという、施策が書かれることになるのではないかというご提案だったと思います。そうしたことも参考にしながら、ご協議いただければと思います。

いかがですか。

○委員 具体的で個別になるかもしれませんが、例えばのアイデアということで、地域の大人がどうつながって、子どもたちをどう育てていくかというところの1つアイデアで、1つ思いついたのは、今は在宅勤務や遠隔学習、学生も大学生ではオンライン学習のケースが増えているのではないかと思います。

私自身も去年2月から在宅勤務をして、もうすぐ1年になりますが、この1年間で会社に行ったのは5日間ぐらいです。それ以外は、全て杉並区の自宅で仕事をしています。

昼間の大人人口は増えていると思います。学生もキャンパスに行かないで、例えば新宿区の大学に行っていたとしても自宅で学習している人たちも増えているので、そういう人たちがサテライトオフィスやコワーキングカフェでもいいのですが、今日もリモートで参加していますが、部屋の中にこもっている大人や学生が今はたくさんいる気がするので、会社のそばでは飲まなくても地元に出る機会とか、地元につながる機会とか、そういう人たちを巻き込める施策が、大人、さらに子どもにつながるとういと思いました。

従来のPTA、親父の会、CSの枠を越えた新しい、新住民の人たち、地域につながっていない人たちを巻き込んでいく施策が、在宅勤務や在宅学習という観点で昼間家に居がちな人たちをうまく引っ張り出す仕組みがあるとういと思いました。

具体論になりますが、例えばのアイデアでコメントしました。

以上です。

○会長 いかがですか。この50～60年、こんなに昼間大人がいる時代はなかったと思います。

私たちも今、ほとんどオンライン教育なので学生はキャンパスにいません。私みたいに暇なのが研究室にこもっていますが、多くの教員も今はほとんどいません。

副会長も今はいないですよ。広いご自宅で書斎がある方が、自宅からオンラインで授業をします。ですからほとんど大学に来ることはない。

困るのはフィールドに出られない。フィールド調査をやっている者としては困っていますが、新しい時代がやって来ている中で、本来こういう時代が来ることは30年ぐらい前から言われていました。オンラインの生活が始まる。そうすれば、人が動かなくても済むようになっていく。

その意味では人々に何が起こるかということ、地域に根を張って、もっとコミュニティを大事にするだろうと言われていたのですが、ちっともそうならなかったのですが、今回強制的にそうさせられてしまったところがあります。そういうものを使わない手はないのではないかというお話だと思いますが、そうしたものも教育とか学びという形で、うまく施策化できるといいかなと思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○委員 冒頭でお話ししたマッチングサービス、それがまさに強制ではなく、やりたい人とやりたい人が結びつけられるものではないかと感じております。

すぎなみ大人塾という場所にいる方のお話を聞いたことがあります。なぜ参加しているかと言うと近くの飲み友達が欲しいからという、楽しいから参加する、そこなのではないか。楽しければ参加するし、つまらなったら参加したくないということ。前向きに参加できるのがやりたいとか、自分から自発的に発言して実行できる場所がないといけないと感じています。地域で何かをつくるのではなく、発した人が、制度や規則で駄目だと言われない活動になっていけばいいのではないかと思います。

もう1点は、私は不登校の生徒が通う塾でサポートしていたことがあって、抱えている問題が本当に多く、サポートが必要な生徒たちは社会から排除されている例が多くあります。僕はこうしたいとか、私はこういうふうにしたいということ、学校側とのやり取りがうまくいかず、家に引きこもってしまう。学校には行けない。制度でやりたい思いを止めてしまうこともあります。制度がないと大変なことになってしまおうと思いますが、やりたいと言ったときに受け入れられる、子どもたちが自発的に言ったことを受け入れてあげる。そういうのがマッチングサービスとか、「いいね」と言ってくれる大人がそこにいたというものがあるので、そういった意味では自発的なマッチングサービスはいいのではないかと思います。



でもあるので、ケという日常生活でおりがたまったものを、一遍そこで祝祭を上げて、ハレの状態にしてかき回し、もう1回ケに戻る、新しい日常を作ることにつながると思います。

それが先ほどから議論している、みんなが一緒になってやってみるとか、制度を少し組み替えるように働いてみることにつながるのではないかと思います。

ほかにご意見はありますか。

○委員 私は学校が、先ほど高円寺学園と言いましたが、杉八小と杉四小が統合して、まちの中から学校が1つなくなって、地域の核となる場所が消えていくことに寂しさを感じました。この地域が、これからどうしてコミュニティを形成していかだろろうということにもすごく問題意識を持っておりました。

そういう中で子どもたちが、学区域が広がってしまう中、どのようにして地域とつながっていくのか疑問に思ったとき、廃れてしまった理由はあるだろうけれども、子ども会のようなものがまちの中にできて、そこに地域の人が入って、ぎくばらんに子どもが話せて、居心地のいい場所ができて、先ほどおっしゃられた祭りをやってみようというのが自然発生的に、子どもたちがやりたいことがかなえられる場所が学校以外にもできるようになれば、学校で取り残されてしまった人たちが、子ども会の中では主役となって輝けるような場所ができたり、そういうものができていくといいなと思っています。

ただ、それを作ろうといったとき無理やりに、強制的につくってしまうと、やらねばならないということになってしまうので、いかに自然発生的にそういうものを作っていけるかが、とても大切だと思っています。

○会長 子ども会ではありませんが、自然発生的に子どもたちが自分たちでこれをやりたいと言って、それを組織しながら一緒に動いて行ける仕組みみたいなものが必要ではないかというご意見だったと思います。

先ほど私は社会教育士と言いましたが、国のほうの、私も関わって変えてきましたが、その1つの議論は、学びのオーガナイザーとして社会教育主事の方々が活躍できないかという議論でした。

オーガナイザーは組織するということになりますが、単に上から指導して組織するのではなく、自分も当事者になって一緒に楽しみながら巻き込んでいく。または対話という関係を作りながら、住民の方々の様々な気持ちを引き出して、それに住

民が気づくことで、自分たちでやろうと動くように、仕掛けを作る人として育成できないかという議論がありました。その中に子どもたちが巻き込まれていくというか、その中で活躍できる自分がそこにあるということが見えてくる在り方も必要ではないかと思います。

今伺っていてもう1つ、さきほどの祭りもそうですが、ついこの間、公開講座みたいなことをうちの研究室でオンラインでやったのですが、そこでアートと社会教育の話をしていただいて、おもしろかったのは、アート志向の公民館で、いろいろなことを仕掛けるのですが、まず最初に食いついてくるのは子どもたちだとおっしゃるのです。

「何をやっているの」と言っても、子どもたちが「変なことやってるよ」とか言って寄って来る。大人は敬遠して見ているだけですが、子どもは寄って来る。子どもたちが寄り始めると、今度はおじいさん、おばあさんが寄って来て、最後にいわゆる現役世代が寄って来る。

社会教育の一番の悩みは何か。子どもが来ないことや若者が来ないことですが、その公民館は最初に子どもが食いついて来るということになっているわけです。その意味では好奇心をくすぐるアートの仕掛けみたいなものというのか、または大人ががんじがらめになっている制度に捉われない、子どもたちが動ける仕掛け方があると思います。

その中で、子どもたちが「あれをやりたい」と言えば、「そんなことをやっていたら」ではなく、「一緒にやろうよ」という大人が出てくるかどうかだと思います。もうちょっと言いますと、AARの関係で、「そうだね」と認めておきながら私たちがやりがちなのは、「でもね」と言ってしまう。すると子どもは発言しなくなる。

だけれども、「そうだね」と言いながら、「だったらこれをやろうよ」と言えば、子どもたちは「僕はこれをやりたい」と言うのではないか。それがAARの循環でもあるので、そうしたことが社会にうまく実装できるというか、回っていく仕掛け作りみたいなものが求められるかもしれないと思って、話を伺っていました。

ほかの委員の方々でご発言はありますか。

○委員 視点が変わってしまうかもしれませんが、子どもの権利条約を子ども自身が知らないことが多いかと思います。豊島区かどこかの取組で、児童館の中に弁護

士の先生がボランティアでいらして、その中で、憲法であなたたちの権利がこういうふうに保証されているというお話を、分かりやすく伝えているらしく、先ほど声に出せない子どもたち、家庭や親御さんの問題で苦しんでいる子どもたちを、そこで救ってあげているという話を聞いています。

杉並区でも、そういう仕組みができるといいのではないかと考えて、お話ししました。

○会長 子どもの声を聞く、子ども自身が子どもの権利条約について知らないことも含めて、権利と言うとかたくなりますが、簡単に言えば自分の話をちゃんと聞いてもらえるということだと思えるのです。まずそこから出発だろうと思います。

私も少し関わったことのある、ある区内の非行少年たちの話ですが、問題を起こして警察沙汰になって捕まって引き戻されますが、そこで説教されると多くの子どもたちはまた戻ってってしまうのです。

だけれども、戻らない子どもたちもいることが分かっている、どういう子どもかという、話せば分かってもらえるという経験を積んでいる子どもたちなのです。彼らは、一旦崩れても帰ってくるというのです。そういうことが大事ではないか。

自分がちゃんと社会に受け入れられていて、居場所がちゃんとある。「これでいいんだよ」と言ってくれる大人がいることが大事ではないかと思えます。そのことに関わる話だったと思います。

そろそろ時間が気になってきましたが、ほかにいかがですか。オンラインの委員はいかがですか。

○委員 会長がアートのお話をされたので、イタリアのレッジョ・エミリアの教育を思い出しました。

委員の皆様はきっとご存じだと思いますが、マラグッツィというレッジョの教育を始めた人が、子どもは100の言葉を持っているが、99は奪われているということで、子ども主体の教育を進めていて、中心にアートがあります。

まち全体が、子どもたちのアートのプロジェクトを支えるために、まちの中に材料を集める場所を作るなど協力して学校を運営している。子どもたちは、まちに出ながら自分が興味を持ったテーマを掘り下げる学習をしています。

今日の議論の中で、子どもたちは学校が大好きで、先生も好きと言っている。そして、おもしろくて楽しい学校にしたいと言っている。学校では多くの時間は学び

の時間に費やされているわけで、そこで学んでいることがおもしろいことが第一の核だと思います。

そのときに何がおもしろいかと言うと、興味を持ったものを探求できるおもしろさをもっと子どもに味わわせたい。そのときにどう地域を活用できるか、学校における授業と地域をどう連動させていくのかは、もちろん今でも各地域、各学校でやっていると思いますが、そこら辺をもっと開発して、授業研究もして、地域の協力を得ながらプロジェクト学習が深まるような、学びのあり方の刷新・革新が最も大事なのではないかと感じます。

○会長 アートの楽しさや探求するおもしろさは、言い方を変えれば探求して発見するおもしろさで、自分が変わっていくうれしさにつながるのではないかと思います。

コミュニティ・スクールをどう活用するか、またはアクティブ・ラーニングがどれぐらい大事かということだと思いますが、先ほどのアンケートで気になったのは、ほかの自治体でのアンケートもそうですが、子どもたちは「学校に行くのは楽しい」と言いますが、誰も「勉強が楽しい」とは言ってくれないのです。「友達に会いに行くのが楽しい」とか、「部活が楽しい」とか、「遠足がうれしい」と言ってくれて、「授業が楽しい」とはほとんど言ってくれないのです。

これは教え方の問題もあるかもしれませんが、先生方がそういう条件にないこともあるかもしれません。先ほどの話ではありませんが、先生方が子どもと一緒に探求できる対等な関係、対話的な関係の中で、子どもたちの探求心を大事にしながら、新しいものに触れていく喜びを自分も感じ取ってうれしくなってくる。自分も変わっていくという関係ができるかも問われていると思います。

もう1つは、先ほどの権利の問題にも関わりますが、私たちは「エデュケーション・フォー・オール」と言ってきました。みんなのために、みんなの権利と言ってきましたが、これからは「バイ・オール」になる必要があるのかもしれないと思います。自分たちでやっていく、みんなと一緒にやっていくという関係を作ること。

今までは、誰かが保証してあげるという感じになっていましたが、むしろ自分たちでやっていく、みんなと一緒にあって、ある意味では「バイ・オール」なのだという関係を作っていくことで、子どもたち自身が主役になり、社会に位置づけを持てるようになっていくかもしれないと、話を伺っていて思いました。

ほかにはいかがですか。ご意見のある方はいらっしゃいますか。よろしいですか。

そろそろ時間も来ておりますので、今日の議論はここまでとして、次回の審議会は、できれば新ビジョンの骨子を固められればと考えていますので、これまで出されたご意見等を踏まえて、私が預かって事務局とやり取りしながら、次回の審議会に全体の骨子案をお示ししたいと思っておりますが、それでよろしいですか。私にお預けいただくこととなりますが、よろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

○会長 それでは最後になりますが、事務局から事務連絡をお願いいたします。

○庶務課長 今回の骨子案は、次回に向けて会長とやり取りしながら、先ほど委員から言っていたように、これありきではありませんので、皆様とメールベースで意見交換をしながら、作り上げていく時間としていきたいと思っております。

次回の日程は、3月29日月曜日の5時からということで少し間が空きますが、その間はそんなやり取りをしながら作っていければと思っております。

今度の会場は、中棟6階の第4会議室となります。会場が戻りますので、ご注意ください。よろしくお願いいたします。

以上です。

○会長 以上で、本日の審議会議事は全て終了いたしました。本日も、円滑な議事進行にご協力いただき、どうもありがとうございました。

本日の審議会はこれで終了したいと思います。

コロナの新規感染者は今日随分減ったという報道がありましたが、まだ油断できませんので、どうぞ皆さんご自愛ください。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —